

小学校におじゃましたら、まず会場の下見をさせてもらい、そのあとは校長室でお茶をいただきながら開始時間まで待たせていただくことが多い。

そういうときは校長先生から学校の様子をうかがう。

「学校司書はいますか?」「絵本を読みに来る親のサークルはありますか?」

「朝読はやっていますか?」などなど。

ぼくがそういう質問を始めると、

やわらかい校長先生だと、司書さんを校長室に呼んで、ぼくとの雑談に同席させてくれたりする。

たいしたことはなくとも、一応ぼくは児童書作家ということになっていて、学校図書館にも本がある。

本を扱うことを仕事とする司書さんでも、若い人では作家と会うのは初めてという人も多く、校長先生がそこに配慮して結び付けようとしてくれる気配がわかるので、ぼくも期待に応えるべく、明るく会話する。

また、校務全般をつかさどる校長先生でも、こと子どもの読書に関することに限定すれば学校司書の方が詳しいのは当たり前で、そこを認めて、途中からはぼくと司書さんの話の聞き役にまわったりする。

校長先生と学校司書が二人で、生徒の読書事情について会話する

場面はあまりないだろうから、これはこれでいい機会かもしれない。

そこで聞き役に回れる校長先生には円熟を感じる。

ぼくとしても司書さんの方が、つつこんだ話が聞けてありがたい。

ぼくのものごとりライブでは通常、教頭先生が最初に前に出て

生徒の前でぼくを紹介してくれることが多いが、学校によっては

その役を司書さんにまかせたりする。

これはこれで司書という立場にスポットが当たって、とてもいいと思う。

司書さんによっては、ぼくがおじゃまする数週間も前から、ぼくの本を図書室の一番前に並べてフェアをやってくれたりする。

すると、子どもたちのぼくへの親近感があがり、歓迎ムードもあがる。

そうになると、当日はもう、なにを言ってもニコニコ聞いてくれるところから始まるので、とてもスムーズに話に入れてありがたい。

で、司書さんや校長先生からその学校の様子。たとえば親が朝、絵本を読み

来ているとか、図書委員会でおもしろい活動をやっているとかの情報を

事前に頂くと、たとえば(ああ、ここの子どもたちは人の話を聞く下地が

できているらしい。これはやりやすいかも)という気になる。

逆に、校長先生が具体的な活動例を言わずに、ただ「本校は読書活動に力を入れています」と言っても、ピンと来ない。

それはどこの学校でもよく言う言い回しにすぎないからだ。

もちろん、ぼくは子どもたちの前に出て最初は手遊びをしながら様子を見て、子どもたちの聞く力量の見当をつけて、する話を選んでいる。もちろん、その見込みが違って、話を始めてから(しまった。むずかしすぎたかも)とか(もっと短い話にすればよかった)とか思うことがないわけではない。

それでも、事前に脇からの情報も入れておくと、大きな見込み違いは減ってくる。招かれた以上、少しでも、その学校の事情に即した語りをしようと心掛けるのは旅のストーリーテラーの責務かとも思う。

だから、話好きな校長先生とは、短い時間だが本のお話をする。一期一会の情報をいただくかわりに、ぼくなりにはできるアドバイスもさせてもらう。他の小学校で聞いて感心した活動例を紹介したりする。時間がある時は図書室に案内してもらうことも多い。

「児童書作家」という肩書きの乱用といわれればその通りだが、ぼくが「こういう本があるといいですよ」とか「この本はさすがに古いかもしれませんが」とか言うことで、学校図書館に新しい本が増えるなら、結果として子どもたちにいいことが起きるかもしれない。それならそれでいいか？と、こっそり考えたりもする。